

いわゆる形式名詞に関わるモダリティ

——ノダを中心に——

金 玉 任

1 はじめに

外国人に日本語を教える際、意味的に難しいものの中に「のだ」「ものだ」「わけだ」などがある。これらはよくモダリティのカテゴリー内で考察されている。本稿では、プロトタイプ（原型）論でアプローチすることによって、

- (イ) 非モダリティ表現のノ（+ダ）とモダリティ表現のノ（ダ）が連続していること。
- (ロ) ノという名詞の持っている抽象的な意味により婉曲な表現が生じる場合があること。
- (ハ) 主題が generic な用法の場合には、ノダは命令から当為の表現へと移ること。を明らかにする。

2 問題所在

ノダについては従来、様々な考察が試みられてきた。

- | | |
|------------------------|------------|
| 1. 説明表現 | 寺村 (1984) |
| 2. 決意、督促表現 | 金田一 (1988) |
| 3. 背景説明、帰結説明、ワケダとの使い分け | 益岡 (1991) |
| 4. 客観（ノの有）、主観（ノの無） | 草薙 (1991) |

しかしコトダ、モノダの場合は、コトやモノの意味と、ムードの助動詞化したときのそれらの意味との区別が、かなりはっきりしているのに対し、ノダの場合は、その区別がむずかしいという問題がある。また草薙 (1991) によると「の」の有無が対照的な場合には、「の」がなければ主観、あれば客観を示す。例えば「買うんだ、買うんだ」の文の場合にも、「買うんだ」は客観的に「買わなければならない（のだ）」という意味をもたせることで、自分の希望を強固に表す表現であり、語用論のレベルの問題とされる。そこで以下の問題が解明されなければならない。

- (イ) ノ（+ダ）とノ（ダ）との境界線は何か
- (ロ) なぜ「の」があれば客観を示すのか

3 本稿の観点

本稿では連体修飾構造におけるノ+ダをノ+ダのプロトタイプとして考える。連体修飾構造におけるノ+ダのタイプには、おおよそ(a)から(f)までの基本のおよび派生的な特

徴があると考えられる。

- a) 名詞で入れ替えられる (意味的特徴)
- b) ガとノの交替 (統語的特徴)
- c) 「の」の指示対象が主題として明示 (語用論的特徴)
- d) 「の」の指示対象が specific な用法 (語用論的特徴)
- e) 文末を否定できる (形態的特徴)
- f) 過去形となる (形態的特徴)

これらの特徴をすべて備えていると考えられる、「わたしが買いたいものは、その赤いのだ」のような表現が、ノ+ダのプロトタイプの具体例である。また、これらの特徴をすべて備えていないと考えられる、「祖父さんのことが書いてあるのです」のような表現が、モダリティ表現のノ (ダ) のプロトタイプの具体例である。そして非プロトタイプの事例として五つのもを挙げることにする。

4 文レベルにおける連続性

演繹法をとって、非モダリティ表現のノ (+ダ) とモダリティ表現のノ (ダ) を両極とする連続体を仮定する。連続性は、文レベルにおける意味の側面と機能面から予測できる。

意味の面からは、非モダリティ表現のノ (+ダ) の方に近づくほど、「の」の陳述度は小さくなり、「だ」の自立性は大きくなる。それとは逆に、モダリティ表現のノ (ダ) の方に近づくほど、「の」の陳述度は大きくなり、「だ」の自立性は小さくなる。

機能面からは、両極に、それぞれ非モダリティのノ (+ダ) とモダリティ表現のノ (ダ) を位置づけ、その中間にはモダリティの助動詞化したノダを位置づけて考える。非モダリティ表現のノ (+ダ) には「底の名詞」(A)のタイプを、モダリティの助動詞化したノダには「説明」(B)、「本性」(C)、「当為」(D)、「命令」(E)、「決意」(F)のタイプを、そしてモダリティ表現のノ (ダ) には「強調」(G)のようなタイプを仮定しておく。以上のタイプには、おおよそ次のような相関関係が想定される。

A (底の名詞) は「わたしが買いたいものは、その赤いのだ」のような例文のタイプで、Aにおける「の」の指示対象は主題で、「わたしが買いたいもの」という名詞句として明示されている。また、「の」は「物」などの名詞で入れ替えができるという特徴がある。構文的には、「の」は連体詞「その」によって、修飾されているので、連体修飾構造の被修飾名詞 (底の名詞) にあたる。したがって、本研究ではA (底の名詞) のタイプを非モダリティ表現と見なすことにする。

B (説明) は、「その度に母は、私が肺病になるのを気にするのです」のようなタイプである。命題を主題もしくは他の命題と関係づけて説明する表現である。「ガノ可変」が起こらない点と、「の」は名詞で入れ替えができない、といった点でA (底の名詞) と相違している。

C (本性) は、「インドは暑いのだ」のような文のタイプである。「の」は名詞で入れ

替えができない、という点でA（底の名詞）と異なっている。そして、「の」の意味はA（底の名詞）より形式化して、主題についての「本性」の意味を表す。（以下、本性と呼ぶ）また、構文的にもA（底の名詞）のような「ガノ可変」が起こらないのでモダリティ表現の助動詞化したノダと認める。

D（当為）は「男の子は泣かないのだ」のような文のタイプで、「拾った物は届け出るもののだ」の文の「もののだ」と同様に、「べきだ」と入れ替えても不自然な文にはならないだろう。ただし、ニュアンスの面では「べきだ」より婉曲な表現であろう。また、シNTAXでは、「べきだ」は「男の子なら泣くべきだった」のように過去形にもできるが、ノダを過去形にすると、「男の子は泣くのだった」のように、元の当為の意味にはとりにくくなってしまふ、という点で相違点を持つ。

E（命令）は「いいかげんに返事をしておくんだね。あとが厄介だから」のような文のタイプである。二人称主格を取り、動詞および文末部分が非過去形であることによって、「スルノダ」は「シロ」に該当する意味を表しており、「命令」と等価の機能を表すとされる（仁田1991）。ニュアンスの面から見ると、ノという名詞の持っている抽象的な意味により、婉曲な表現が生じると思える。（するのだくしろ）

F（決意）は「僕はそこからあの人を救い出すんです」のようなタイプで、話者の「意志」や「決意」の意味を表す。「人称制限」「非過去」といった文法的制限を、E（命令）と共有する。「ぞ」より婉曲で、かつ丁寧な表現だと思う。

G（強調）は「祖父さんのことが書いてあるのですの」のような文のタイプで、話者が、自分しか知らない情報を押しつけたり、心情を告白したりする言い方だと思う。さらに、「～なのであるのである」式の二重肯定、すなわち、反復の表現形式によって強い意味が生じる表現だと思われる。（以下、強調と呼ぶ）主に、女性が多用するようだ。また、構文的にも終助詞のようなふるまいをしているのでモダリティの表現に位置づけ、それぞれとの相関関係を見ることにする。

それでは、(a)から(f)までの観点によって、A（底の名詞）からG（強調）までの連続性をみていこう。まず、意味的な側面と関係のある(a)からテストすることにする。

4.1 名詞で入れ替えられるか

文末表現のA（底の名詞）からG（強調）までの例は、大体「XはYのだ」式の文になり、ノは3段法則（A=B、B=Cならば、C=A）によって次のように比べられる。まず、A（底の名詞）のタイプから見ると、

(1) わたしが買いたいものは、その赤いのだ。

X=わたしが買いたいもの（名詞）

ノ=X、ノ=名詞

→ わたしが買いたいものは、その赤い物だ。（A：名詞で入れ替え可能）

のように、Xは「わたしが買いたいもの」で、かつ名詞である。「の」はXを指し、Xの意味を持つ。したがって、3段法則によって「の」は名詞になるわけである。つまり、A（底の名詞）の「の」は名詞（物など）で入れ替えることができるので、非モダリテ

イ表現のノ(+ダ)であると言えるだろう。ところが、G(強調)のような文のタイプは、

(2) おかみがあがってきて、先生おそいですわねえ、お電話してみましょうか、と言った。

「いいえ、よろしいんですよ」 (恋の巣)

X = (電話) 名詞

ノ ≠ X、 ノ ≠ 名詞 (G: 名詞で入れ替え不可)

のようなテストが示すように、「の」は名詞の意味を持っていないので、名詞で入れ替えることができない。次に、B(説明)を見ると、

(3) ……。芝居や寄席でも怪談が流行していたので、夜はどうも不気味に思えたものです。それでも私は何と言うことなしにその夜、一人で浜に出て見たんです。

(若き日の思い出)

X = 私 (名詞)

ノ ≠ X、 ノ ≠ 名詞 (B: 名詞で入れ替え不可)

のように、「の」は名詞で入れ替えることができない、といった点でA(底の名詞)と異なっている。C(本性)のタイプも同様である。

(4) 「氷は火に溶かされてしまうんですよ。どんな厚い氷だって、たとえ君が冰山だって」

(女神)

X = 氷 (名詞)

ノ ≠ X、 ノ ≠ 名詞 (C: 名詞で入れ替え不可)

そして、D(当為)やE(命令)の類型の文を見ると、

(5) 男の子は泣かないんです。

(日本語例文シリーズ)

X = 男の子 (名詞)

ノ ≠ X、 ノ ≠ 名詞 (D: 名詞で入れ替え不可)

(6) 喋らず、働んだ。

X = (君) (名詞)

ノ ≠ X、 ノ ≠ 名詞 (E: 名詞で入れ替え不可)

これら二つのタイプの文の「の」は名詞の意味を持っていないので、名詞で入れ替えることができない。D(当為)は、「べきだ」と入れ替えても、意味的に不自然でないので、モダリティの助動詞化したノダと認めてよさそうだ。ニュアンスの面では「べきだ」より、「のだ」の方が婉曲な表現だと考えられる。同じくモダリティ表現の助動詞化したノダに入るF(決意)も「の」は、名詞で入れ替えることができない。

(7) 「お父さんのしつこい愛情の中で、あの人は泥まみれになって育ったんです。僕はそこからあの人を救い出すんです」

(女神)

X = 僕 (名詞)

ノ ≠ X、 ノ ≠ 名詞 (F: 名詞で入れ替え不可)

なお、D(当為)、E(命令)、F(決意)の類型の文は「のだ」の直前に「た形」が

来ないという点で共通している。三者は、実現していない事態に関する話者の態度を表す表現だからである。

4.2 「が」と「の」の文替

ふつうの体言の場合、連体修飾構造で見られる「ガノ可変」のテストが「のだ」に適用されたのは、三上(1953)からである。三上は「のだ」を、「の」(形式体言または準体助詞)+「だ」でなく、一個の「準用言(準詞)(準形容動詞)」と見るべきだとし、その根拠として、「手紙が来たのが遅れたのだ」の文の末尾の「のだ」場合には下線の「が」を「～の」に交替できないことを指摘している。ただし、文末のノダのうち非モダリティ表現のノ(+ダ)のA(底の名詞)のようなタイプを見ると、

(8) わたしが買いたいものは、その赤いのだ。

のように、「の」は連体詞「その」によって修飾されていることがわかる。したがって、連体修飾になり、「の」は連体修飾構造の被修飾名詞(底の名詞)にあたるということができよう。一方、G(強調)の類型を見ると、次のように「ガノ可変」が起こらない。

(9) おかみがあがってきて、先生おそいですわねえ、お電話してみましようか、と言った。

「いいえ、よろしいんですよ」

(恋の巣)

→ *いいえ、(電話の)よろしいんですよ。(G:ガノ不可変)

上例のように「ガノ可変」が起こらない場合は連体修飾構造の被修飾名詞(底の名詞)とは見せないので、意味的な面だけでなく、構文的にもモダリティ表現と言えるだろう。

B(説明)におけるノダは、

(10) 「お母さんのお耳に入ったら」

「大丈夫ですよ、それより母は僕があなたを好きになりすぎはしないかと心配しているのです」
(若き日の思い出)

→ *それより母は僕があなたを好きになりすぎはしないかと心配しているのです。

(B:ガノ不可変)

のように、「が」を「の」に変えると不自然な文になってしまう、という点でA(底の名詞)と異なっている。次のC(本性)のタイプについても同じことがいえる。

(11) 若い女というものは誰かに見られていると知ってから窮屈になるのではない。

→ *若い女というものは誰かに見られていると知ってから窮屈になるのではない。

(C:ガノ不可変)

D(当為)とE(命令)はいずれも、「が」と「の」の交替によって不自然な文になる。

(12) 男の子は泣かないんです。

(日本語例文シリーズ)

→ *男の子の泣かないんです。(D:ガノ不可変)

(13) おい、止めるんだ。

→ *(君の)止めるんだ。(E:ガノ不可変)

つまり、意味的な面だけでなくシンタクスの面においてもモダリティ表現であることがわ

かる。F（決意）も同様である。たとえば、

(14) 「お父さんのしつこい愛情の中で、あの人は泥まみれになって育ったんです。僕はそこからあの人を救い出すんです」
（女神）

→ *僕のそこからあの人を救い出すんです。（F：Gノ不可変）

のように、「が」と「の」の交替によって不自然な文になるので、モダリティ表現と言えるだろう。

以上、「が」格と「～の」の交替によって、不自然な文になる場合は、連体修飾構造の被修飾名詞（底の名詞）とは認められないので、モダリティ表現と見なすことにした。

4.3 「の」の指示対象が主題で明示されるか、また specific な用法か

ここでは、語用論における二つの特徴を見ることにする。一つは、「の」の指示対象が、主題として明示されるかどうかであり、もう一つは、その指示対象が specific な用法になるか、generic な用法になるかである。まず、A（底の名詞）のタイプの「の」は、

(15) わたしが買いたいものは、その赤いのだ。（A：主題）

が示すように主題が明示されている。それに、主題の指示対象が「の」になっている。したがって、A（底の名詞）のタイプは、「の」の指示対象が主題として明示されていることが分かる。これと関連して、益岡（1991）では主題論がモダリティ研究に対して少なからぬ意義を有することを示しており、主題と真偽判断モダリティと深く関わりあっているという点を指摘している。具体的には真偽判断文のみが有題文であり、非真偽判断文（真偽判断文のモダリティを持たない文）は無題文であるとしている。益岡のこの指摘を見ても、A（底の名詞）が主題文であることは当然であろう。つまり、真偽判断のモダリティの形式として「だ」「だろう」などを挙げているからである。それに対し、モダリティ表現であるG（強調）においては、

(16) おかみがあがってきて、先生おそいですわねえ、お電話してみましょうか、と言った。

「いいえ、よろしいんですのよ」（恋の巢）

のように、主題が明示されていない、そこで、井上の1989での「一般に『XがYだ』が『YはXだ』と言い替えても意味（重点の場合も含めて）が変わらない場合の『Yだ』は陰題と考えてよい」（p154）という説明から、次のように書き換えて見ると、

(17) いいえ、（私は、電話は）よろしいんですのよ。（恋の巢）

≠よろしいんですのは私（電話）です。（G：*主題）

が示すように、陰題とも考えられない。したがって、A（底の名詞）とは違って「の」の指示対象が主題として明示されているとは言えない。E（命令）も同様である。

(18) おい、どうした、はやく起きるんだ。

≠はやく起きるのは、（君だ）。（E：*主題）

次にB（説明）のタイプは、

(19) ……。梓に舞台があるときでも、尾山はかまわず鎌倉で梓の帰りを待つのがこれまででのならわしであった。つまり彼は週末を鎌倉の海を眺めて過ごすことにより休

養をとっていたのである。(B:主題)

のように、主題が明示されている、という点でA(底の名詞)のタイプと共通している。

C(本性)についても同じことがいえる。

(20) 若い女というものは誰かに見られていると知ってから窮屈になるのではない。

(女神)

(C:主題)

次にD(当為)を見ると、

(21) 男は、細かいことにぐずぐずするのではない。(D:主題)

が示すように、主題が明示されている。とすると、B(説明)、C(本性)、D(当為)は、いずれも主題が明示されているという点ではA(底の名詞)と共通していることになる。ところで、A(底の名詞)とB(説明)は、「の」の指示対象が「その」「彼」であって、specificな用法である。

(22) わたしが買いたいものは、その赤いのだ。(A:specific)

(23) つまり彼は週末を鎌倉の海を眺めて過ごすことにより休養をとっていたのである。

(B:specific)

草薙(1991)では、「赤いを見せてください」の「の」は文法的に名詞を入れなければならないところを、名詞を省略する目的で入れる本来の意味での「代名詞」であると述べている。そこで、「赤いを見せてください」の文を「私が見たいのは、その赤いのです」のように変えて考えて見ると、文末の「のだ」にも、機能面では代名詞的用法があると行ってよいだろう。さらに言えば、specificな用法は機能面では代名詞的用法とつながるだろう。一方C(本性)とD(当為)は、それぞれ「若い女というもの」「男」であって、genericな用法になる。

(24) 若い女というものは誰かに見られていると知ってから窮屈になるのではない。

(C:generic)

(25) 男は、細かいことにぐずぐずするのではない。(D:generic)

ちなみに、これと関連して井上(1989)では、「鯨というものは一般にこういうものだ」というふうに品定めする、いわゆる「全称命題」では必ず「Xは」となる、と述べている。

次に、F(決意)のタイプを見ると、

(26) 「海に入ろうか」野島はそう言った。

「入ってもいいね」

「入ってから僕は一ねむりするのだ」

(友情)

(F:対照)

のように、文脈上、F(決意)における「～は」は対比や対照の意味と解釈される。とすると主題として明示されている他のタイプとは異なっているとも言えるだろう。

以上、語用論における二つの特徴、つまり、「主題」との関係と、specificな用法との関係について述べた。その結果、ノダがこれらと関連していることが明確になった。

4.4 文末が否定・過去となるか

ここでは、形態的な特徴を見ることにする。

「形式自体が、過去になることもなければ、否定にもならず、話し手の心的態度のみを表す表現形式を〈真正モダリティ形式〉とする」という仁田(1991)の見解に立って、ノダを再分類すると、モノダと同様に非モダリティ表現、疑似モダリティ表現、真正モダリティ表現の三つに分かれる。まず、真正モダリティ専用の形式と言えるタイプとして、本稿でのG(強調)のようなタイプを挙げることができる。G(強調)は「ヨ」「ワ」「ナア」のように、真正モダリティとしか使えない類型である。つまり、次のように、それ自体が否定や過去になることがない。

(27) おかみがあがってきて、先生おそいですわねえ、お電話してみましようか、と言った。

「いいえ、よろしいんですのよ」 (恋の巢)

→ *いいえ、よろしいんですのじゃないよ。

→ *いいえ、よろしいんですのだったよ。 (G:真正モダリティ)

もし、G(強調)のようなタイプを否定や過去形にするならば、それぞれ、「いいえ、よろしいんではありませんの」「いいえ、よろしいんでしたの。」のような文にするしかない。それに、話し手の心的態度のみを表すので真の典型的なモダリティ表現と言えるだろう。それに対して、A(底の名詞)のようなタイプは、それ自体が否定や過去になることができる。

(28) 私が買いたいものは、その赤いのだ。 (A:非モダリティ)

→ 私が買いたいものは、その赤いのではない。

→ 私が買いたいものは、その赤いのだった。

それに、A(底の名詞)は「発話時における」「話し手の」といった適正な条件の元でも「の」による話者の心的態度の表現とは認めない。だからモダリティ表現のノダとは言えないのである。モダリティ表現の助動詞化したノダは、疑似モダリティ形式であると考えられる。まず、B(説明)を見ると、

(29) それでも私は何とすることなしにその夜、一人で浜に出て見たのです。

→ それでも私は何とすることなしにその夜、一人で浜に出て見たのではありません。

→ それでも私は何とすることなしにその夜、一人で浜に出て見たのでした。

(B:疑似モダリティ)

のように、形式自体が過去や否定になることもある。そして、B(説明)は「発話時における」「話し手の」といった適正な条件の元では、真正モダリティ(相当)の表現形式として使われうる形式である。次に、C(本性)とD(当為)のタイプは、

(30) 若い女というものは誰かに見られていると知ってから窮屈になるのではない。

→ 若い女というものは誰かに見られていると知ってから窮屈になるのである。

→ *若い女というものは誰かに見られていると知ってから窮屈になるのだった。

(C:疑似モダリティ)

(31) 男は、細かいことにぐずぐずしないのだ。(D:疑似モダリティ)

→ 男は、細かいことにぐずぐずするんじゃない。

→*男は、細かいことにぐずぐずしないのだった。

などが示すように、ノダ自体を過去にすると、それぞれ元の本性や当為の意味にはとりにくくなるだろう。

仁田(1991)では、当為判断に繋がる表現から移行・派生した働きかけの表現として、「スルノダ」と「スルノデハナイ／スルデナイ」を挙げている。そして、二人称主格を取り、動詞および文末部分が非過去形であることによって、「スルノダ」は命令と、「スルノデハナイ」は禁止と、等価の機能を表す表現へ移行すると述べている。したがって、E(命令)のようなタイプは当然ながら疑似モダリティである。

(32) 朝子はほとんど無意識に、父の手から受話器を奪い取っている自分の手におどろいた。

「いいかげんに返事をしておくんだね。あとが厄介だから」(女神)

→ いいかげんに返事をしておくのではない。

→*いいかげんに返事をしておくのだった。(E:疑似モダリティ)

E(命令)とD(当為)との違いは、「二人称主格」といった文法的条件の制限であろう。そして、ニュアンスの面から見ると、ノダを使うことによって、婉曲な表現が生じる場合があり(乗るのだく乗れ、乗るのではないく乗ってはいけない)、その原因はノの抽象的な意味によるものではないかと考えられる。F(決意)のタイプを見ると、

(33) 「お父さんのしつこい愛情の中で、あの人は泥まみれになって育ったんです。僕はそこからあの人を救い出すんです」(女神)

→*僕はそこからあの人を救い出すのではありません。

→*僕はそこからあの人を救い出すのでした。(F:疑似モダリティ)

上例のように、F(決意)は、「人称制限」「非過去」といった文法的制限をE(命令)と共有する疑似モダリティである。

5 おわりに

以上の考察の結論をまとめると、以下のようなものである。特にプロトタイプによって明らかになったのは1、2である。

1 従来、ノ+ダとノダは対立するものとして扱われてきた。が、プロトタイプで観察したとおり、必ずしも相対するものだけでなく、程度の高いものから無性格のものまでの間に中間的なものもある。「底の名詞—モダリティの助動詞化—モダリティの終助詞化」というとらえ方を提案した。

(イ) 表のような分類ができ、モダリティの表現が他の文法現象に影響を与えていることがわかる。(表参照)

(ロ) ノダのさまざまなモダリティ表現の意味機能は、それぞれの実質的概念の濃淡

表

ダの陳述度 (自立性)	大	小
ノの陳述度	小	大
表現上の機能	非モダリティ ← 疑似モダリティ → 真正モダリティ 話者の事態に対する心的態度 聞き手めあて	
構文上の機能	連体修飾構造 ← モダリティの助動詞 → 終助詞	
	A底名詞	B説明 C本性 D当為 E命令 F決意 G(強調)
a) 名詞可変	○	× × × × × × ×
b) ガノ可変	○	× × × × × × ×
c) specific	○	○ × × × × × ×
d) 過去	○	○ × × × × × ×
e) 主題表示	○	○ ○ ○ × × × ×
f) 否定	○	○ ○ ○ ○ ○ × ×
類似表現	リンゴ 本	ラシイ ヨウダ ネ ヨ

や自立性と相関している。つまり、モダリティ表現の方に近づくほど、「の」の陳述度は大きくなり、「だ」の自立性は小さくなる。

- (イ) ノ (+ダ) がモダリティ的意味にもとられやすいのは、文末といった条件とノの抽象的な意味によるものである。そして、この結果はモダリティ表現とシンタクス (語順) と意味 (実質的概念) が相関していることを示唆している。
- 2 主題が generic な用法の場合には、ノダは命令から当為の表現へと移るが、これは話者の論点为主题によって中立的に変わるからである。モダリティ表現と主題が密接に相関していることが明らかになった。
 - 3 ノという名詞の持っている抽象的な意味により婉曲な表現が生じる場合がある。(D命令：行くのだから行け)

今後さらに、本稿を元に、同様な組成である「ものだ」「ことだ」などとも関連して考察を進めたい。

参考文献

- 井上 和子 (1989)『日本文法小事典』大修館書店
金田一春彦 (1953)「不変化助動詞の本質」『国語国文』第22巻23号
(1988)『日本語—新版(下)—』岩波新書
草薙 裕 (1991)『日本語はおもしろい』講談社
小金丸春美 (1990)「ムードの『のだ』とスコープの『のだ』」『日本語学』1990年9巻3号
近藤 泰弘 (1989)「ムード」講座『日本語と日本語教育』4巻 明治書院
名柄すすむ (1987)『外国人のための日本語例文・問題シリーズ2：形式名詞』荒竹出版
田中 望 (1983)「文末表現の解釈」『日本語学』1983年9月号
田野村忠温 (1990)『現代日本語の文法：「のだ」の意味と用法』和泉書院
角田 太作 (1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
寺村 秀夫 (1975)「連体修飾のシンタクスと意味—その1—」『日本語・日本文化』第4号、大阪外国語大学留学生別科
(1982)『日本語のシンタクスと意味1』くろしお出版
(1984)『日本語とシンタクスと意味2』くろしお出版
中右 実 (1979)「モダリティと命題」『日本語と英語と』くろしお出版
仁田 義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
浜田 留美 (1987)「ワケ、ノ、モノ」『国際学友会日本語学校紀要』第12号
堀口 和吉 (1985)「ノダの表現性」『山辺道』第29号、天理大学国語国文学会
益岡 隆志 (1987)『命題の文法』くろしお出版
(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
益岡隆志・田窪行則編 (1989)『基礎日本語文法』くろしお出版
松岡 弘 (1987)「『のだ』の文・『わけだ』の文に関する一考察」『言語文化』第24号、一橋大学語学研究室
松村 明 (1971)『日本文法大辞典』明治書院
三上 章 (1960)『象は鼻が長い』くろしお出版
森田 良行 (1980)『基礎日本語2』角川書店
森山 卓郎 (1990)「モダリティ」『日本語学』1990年9巻3号

用例出典

- | | |
|------------------|------|
| 立原 正秋 『恋の巢』 | 新潮文庫 |
| 三島由紀夫 『女神』 | 新潮文庫 |
| 武者小路実篤 『若き日の思い出』 | 新潮文庫 |
| 『友情・愛と死』 | 新潮文庫 |

(筑波大学大学院 文芸・言語研究科 応用言語学)